

信頼障害仮説からみた大学生の インターネット依存傾向

キーワード：インターネット依存，信頼感，大学生

菊地 創 富田拓郎

中央大学文学部

ネット依存の定義と有病率

- ネット依存は、「インターネット使用者のコントロール不能な状態、インターネットにはまって時間が増大していること、弊害が生じているにもかかわらずやめることができない状態」と定義され、行動嗜癖の一つだと考えられている（Young, 1998）。
- 内外いずれにおいても若者世代（中学生～大学生）における比率が高く、**有病率を概観すると2-8%**とされている（中山, 2015；岡安, 2015）。

ネット依存が及ぼす 心身への影響（中山・樋口，2016）

- ネット依存傾向の高い者は**睡眠の質が低く，抑うつ傾向や不安傾向が高い。**
- 遅刻，講義中の居眠り，留年，退学，成績低下など**学業面にも多大な影響を及ぼす**ことが指摘されている。

信頼障害仮説（小林，2016）

- アディクシヨンの本質は，さまざまな生きづらさから生じる負の感情に対して**他者との感情交流がないこと**や，**単独で完結する行動以外に対処する方法をもたないこと**。
- 依存症者が依存症者である所以は，**彼らが抱えている生きづらさ**と，その経験から派生する**自他への不信と心理的孤立**。
- それゆえに，**適切に周囲に助けを求めることができず**，単独行動だけでネガティブな感情に対処しようとする。

信頼障害仮説とネット依存（小林，2016）

- 行動嗜癖は一見すると単独行動ではなく，他者に頼らなければ不可能な行動に見えるが，アディクションとしての買い物やセックスの相手は，**本音の感情交流を伴う他者ではなく，自分の欲求を満足させるための手段や道具にすぎない。**
- インターネットに関して本質的に匿名性をはらんでおり，**ネット依存に関して信頼障害仮説が成り立つ可能性がある。**

先行研究の課題と本研究の目的

- ネット依存においても信頼障害仮説が練り立つことが示唆されているが（小林，2016），**信頼障害仮説の観点からネット依存を検討した実証的研究は行われていない。**
- 本研究では一般大学生を対象に質問紙調査を行い，信頼障害仮説の観点から大学生のネット依存を検討することを目的とする。

調査手続き

- **調査時期と調査参加者**

- 2017年9～10月に実施し，関東圏の大学4校での配布に加えて，機縁法によって409名から回収し，有効回答の得られた401名（男性191名，女性209名，不明1名）を分析の対象とした（有効回答率98.04％）。平均年齢は20.36歳（SD=1.27）であった。

- **倫理的配慮**

- 第2著者の所属機関における学内倫理委員会による倫理審査の承認を得て実施した。

使用尺度

- 日本語版GPIU2 (Yong, 2013) : GPIU2の邦訳版である。POSI, Mood Regulation, Compulsive Use, Absorptionの4因子15項目で構成され「全くあてはまらない (1) 」から「非常にあてはまる (8) 」の8件法で回答を求めた。
- 信頼感尺度 (天貝, 1997) : 不信, 自分への信頼, 他者への信頼の3因子 18項目で構成され「あてはまらない (1) 」から「あてはまる (4) 」の4件法で回答を求めた。

相関係数と基礎統計量

Table1 相関係数と基礎統計量 (*Mean, Standard Deviation, α 係数*)

GPIU2	1	2	3	4	5	6	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
1 POSI	--						12.22	5.91	.84
2 Compulsive Use	.52 **	--					17.53	6.89	.88
3 Mood Regulation	.55 **	.57 **	--				9.01	3.80	.85
4 Absorption	.66 **	.73 **	.58 **	--			11.90	6.20	.83
信頼感尺度									
5 不信	.32 **	.23 **	.26 **	.27 **	--		18.08	4.73	.78
6 他者への信頼	-.26 **	-.12 *	-.08	-.22 **	.37 **	--	14.54	3.26	.82
7 自分への信頼	-.23 **	-.20 **	-.13 **	-.22 **	-.26 **	.51 **	13.71	2.10	.74

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

モデルの検討（共分散構造分析）

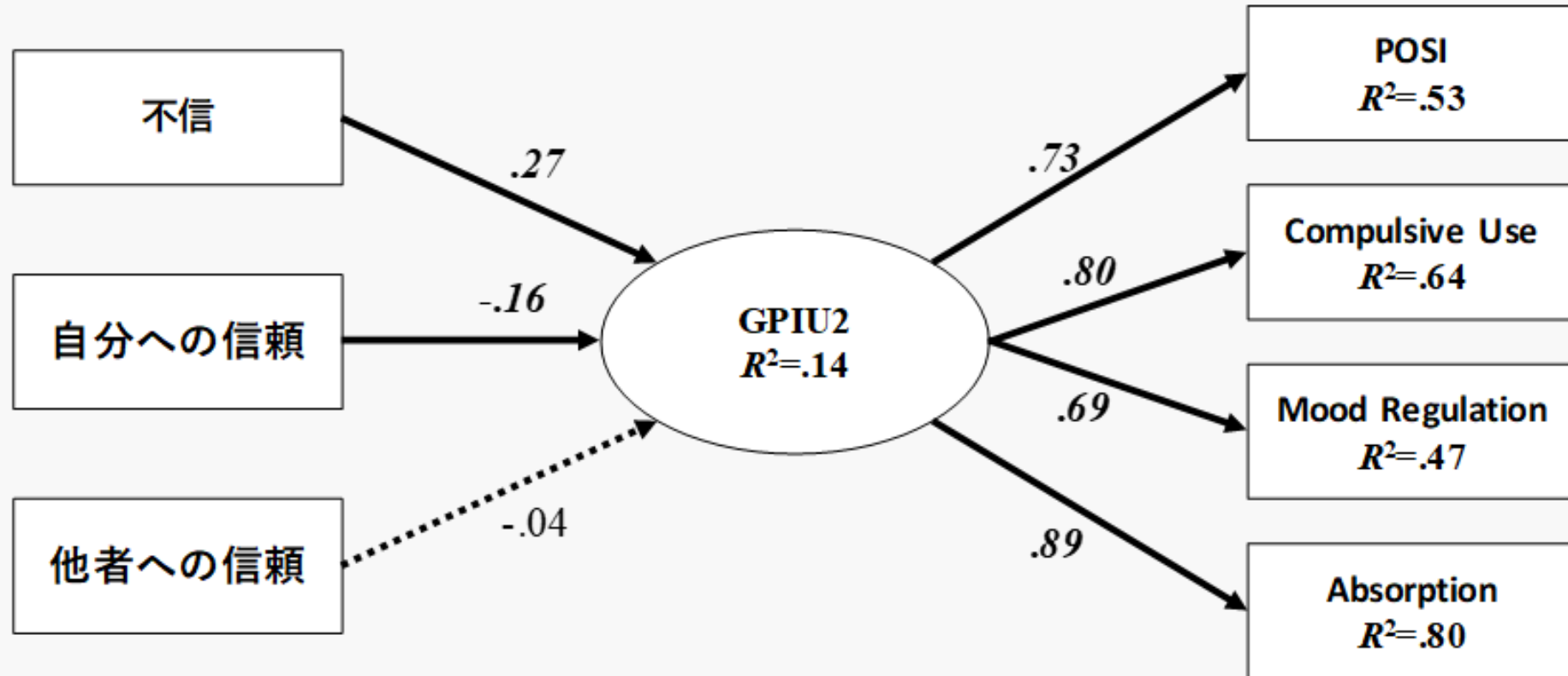


Figure1 信頼感がネット依存傾向に与える影響に関するモデル図

誤差項は省略し、有意な結果は太実線、斜体数字で示した。

モデルの検討（共分散構造分析）

- 適合度は**CFI=.97**, **GFI=.96**, **RMSEA=.09**であり許容可能な値が示された。
- 不信および自分への信頼からGPIU2へ有意な効果が認められた。
- 小林（2016）では、不信および自分への信頼が物質使用と関連することを報告しており、本研究の結果は小林（2016）の報告と概ね一致していた。

他者への信頼から有意な効果が認められなかった背景

- ネット使用に伴い、学校など対面で知り合った友人からのソーシャルサポートが低減するが、ネット上で知り合った友人からのソーシャルサポートが増加し（安藤・高比，2006），ソーシャルサポートを提供されるとサポート源への信頼感が上昇する（譚ら，2013）。
- そのため、ネット依存傾向の高い者は、対面で知り合った他者への信頼が低い一方で、ネット上で知り合った他者への信頼は高いことにより、他者への信頼から有意な効果が認められなかった可能性がある。

臨床的示唆

- 従来の介入方法（SST など）に加えて、不信の解消と自分への信頼の向上を促進することができればネット依存傾向のより大きな改善に繋がる可能性がある。
- **MBRP（Mindfulness-based Relapse Prevention）** などを通して**セルフ・コンパッションを高める**（Bowen et al., 2010）ことで、自分の良さを認められるようになったり、健康的な人間関係を築くことができるようになり（Neff & Germer, 2018）、不信の解消と自分への信頼の向上が促進され、より大きな介入効果が得られる可能性がある。

本研究の限界と今後の課題

- 本研究のデータは自己評定のみ限定されている。自己評定のみでは詳細な状態像を把握することには限界がある。今後は多元的、客観的データと合わせて検討していく必要がある。
- GPIU2を用いて全般的なネット依存傾向について検討したが、オンラインコンテンツの種類は多岐にわたり、**コンテンツの種類や利用目的によっても依存の様相や諸変数との関連が異なる可能性**があり、今後はより詳細な検討を行なっていく必要がある。

ご清聴・ご視聴ありがとうございました。

- 筆頭著者連絡先

- Email : kikuchisou.shinri@gmail.com

- 利益相反開示

- 申告すべきものなし。